

葛

児玉花外

いさふ川は泡たて、
半ば破れたる石垣の
下をいそぎて流れゆく

燃ゆるがごとき赤心もて
優しの葛は頑固の
石の胸をば温むる

小さき花

小高き丘のしたかげに
生いたる草に雨の来て
ある夜しづかに細語きぬ

如何なる事をかたりしか
知るものたえてふかりしが
白の出ぬ前み縁らしき
小さき花の見られたる

魚家

おらが慈父さん漁夫ておぼる

朝から晩まで

彼の

藝母は好みて

網を結き

巾は街子出て

奥を賣る

放ちし馬

昨日捕へし小き馬

いと哀れなる囚人の

檻よりのごく姿して

緑の森林や花さける

岡をのぞみて狂ひしが

竹籠を開けば思ひきや

戀しき森林みゆかずして

雨段の中みつきいりぬ

流星

思あまりて唯一人

橋の上をいへ行めば
彼方の空に流星の
恨ありげな影をけり

蛭

悲しや吾は蛭のこと
溝の此世は朝夕よ
毒を吸ひつてもかくなり

古代ありし其の如き
いとけき清き真清水を

吾は飲むと思へども
今は其の水涸れ果て
は世よなきぞ恨みなる

濁りも濁る溝の中
何時まで吾は悩むべき
慈恵も憚き大神の
御午子やがて救はれて
永久涸れず濁らざる
生命の河の水飲まん

いさ、川

暗黒の突立つ牢獄の
側影もいささか
目も眠れる人々
夢をいづこへ運びゆく

孤島

啼げる群鳥のうちはたれ
枯木の枝に唯一羽
静まらざる鳥あり

響みありや悲さを

胸につみていはざるや

知るよしありてはあらぬあり
一歩さへも啼かざれば

俗世の風の荒えして

響は今や疲れしも

其の眼はたぐよ天あり

其の慰心藉は天あり

あく、苦痛多き世の中や
石の礫の飛び来り

鳥は哀れ飛び去るぬ

鏡

浮世の事あまりにも

鏡の如き吾胸に

映るのいとくつらければ

幾たび吾は碎かんと

あゝあゝ冥も思へども

御恵み深き大神の

映れる影を如何にせん

海摩

烈しく窓を打ちたりし

風は雪とぞふりぬらん

遠く聞ゆる笛の音の

近づきまゝ覗へば

げみも哀しき盲人は

色なき里に住む人よ

悲しき人よふや君

月日の光はた星の

光見るこゝと叶はずも

浮世の汚れ憂き事を

眠み見ることはあらぬなり

代々や輝く黄金やうごんの

老らうを眩くらむこともなし

持てる二本ふたつの腕かみは

弱き者よをば虐あぐる

力はふきもつ心こころたる

人をたすくる力あり

世よ媚こび人ひとの諂たひて

身を立つ力ありぬとせ

正ただしき業わざをいそいで

自らみづかり力あり

闇路やみぢをたどる一本ひともの

杖つゑは貴たかきき寶たからなり

杖つゑの教おし導なずかるをもきては

道を歩あみしことあり

あゝ、浮世の闇路やみぢ峻たしきも

暫やがちは君きみべわび人ひとよ

闇世やみよを出いでては其時そのときは

天國てんこくのあけほの望のぞむ時とき

長き旅路を星しとき

天國の門也よ着きし時

今は伊い家いをたどるらん

聲を吹雪ふゆを埋うめてし

竹たけの音ねいとどかきあり

燕

外家の軒のきに羽う来て

掌てのひらいし去年こぞのつばえりめ

地ちたちがへる其時は

来りし時ときを数かまゝして

彼か方の立たてる青柳あざなの

枝えだをふらびて羽うをひ

いと忙いそしく見えよしが

幾いく海山うみを越こえぬべき

羽うも共ともに敢あてて

諸もろ聲こゑ高く勇ゆうまゝく

木の葉はのごとく飛びまゝに

年はまたもやかり来て

柳やなぎの糸いとは若みどり

燕つばもこゝに帰り来ぬ

りもかふ救生唯ふたつ
去年のかへりみひきかへて

やよつばくらくらめ事向はん
春子生れて春子死し

しき袂去らぬ汝が身みも
海山隔つ離別あり

共とも悲かなしき思あり
清き心をほのみせて

胸むねふいくその悲かなみを
つむや哀れつばくらくらめ

軽き汝なの羽翼うよくも
産うまいくその惣むすをば

もてるや哀れつばくらくらめ

否々ゆれは慮おぼるまじ

浅あき心の一ひとすぢよ
悲かなしきわれの心こゝろもて
汝が身をわれは慮おぼるまじ

あつばくらくらめ
汝は天使の姿すがたして
神の命令おほいせを傳へ来る

汝は平和の春の魂
汝は樂たのしき愛の聲

雲子うゑこ徒た身みゆる高殿たかどの子
假かりの任まか居ゑをりとめずよ
荒あ野のの末の賤せが家子こ

いとも佗しき世集を作り
其の都もすさびたる
淋しき^い都もへだてなく
春を生^いろげくる優一さま

あつばくくらめく
去^い軍の別みひきあへし
樂一く汝を^い迎へまし
林家よ愛ともちきたす
汝を樂一く^い迎へまし

墳墓を撫して

休身一つをたもちかぬ
定めなき世の面影を
見せて漂ひ^い雲の
空を眺め^いさまよ(は
いつしか来る^い博原
山の裾より吹き来る
風よ悲一き調へあり
盡せぬ長き^い御居あり
みれる^い博かき^いわけて
山ればそこよ^い墳墓^い土の

一つ淋しく立てりける

瘦こせたる手をば長ながく伸のべて

癒なづれば怪あやし杖つゑ胸むねよ

無限むげんの思おもひき来きたる

「やよ境おくづき更さらよ世よはししも 一行いっぺいあける

胸むねよ文字もじをば刻きまれて

闇やみと走はの其その間まよ

何時たゞの時ときの世よよりか佇たぐめる

杖つゑは此この世よに生なれ出でて

早くも闇やみよ立た迷まひ

塵ちり土つちよはむせび風かぜよ泣なき

人の心こころの情なさけななくて

涙なみだみもろき田あか子ことは

何時たゞしか杖つゑはふりまけり

春はる夏なつ物ものやはた冬ふゆの

四よ時ときの景けい色しきを夢ゆめと見みて

東あづまの空そらエえみちかくと

昇ある朝あ日ひの光ひかりより

夕ゆふの影かげを喜よろこびて

草くさ葉はの上うへよおく露つゆの

くすき光あかりを身みとし

人の心こころの闇やみ路みちをば

辿たどりて年としを徑みちたりけり

や世よは闇やみかさりらふがり

神より受けし己が身の
杖は杖を揮ひつゝ

か所を闇路を辿らふん
躓く石のあらばあれ

陥る谷のありばあれ
世の立てる下こそは

杖の行くべき所ふれ
永久の平和のある所

生命の泉湧く所
愛と自由の住む所

輝く光明見る所
杖が持物と誇りたる

巾づかの智慧と力をも
人を恨むる心をも

要魔の前におかづきて
あけくれ日ごとく罪をかす

弱き小さき心をも
穢き土を投げ棄てて

世の下に入るまでは
杖は思ひて水銀の

杯とてを飲みせん
氷の刃受けもせん

朝も夕もあはれきもせん
やよ、墳墓よ

眞空よ

人子は見えぬ鉄胸子

保く刻られし文字を見よ

未だめくる血のゆるぎかみ

御言く太鼓の春の悔

夏世の風を知らざりし

慰せしが如き鉄胸子

刻られ初めし文字を見よ

苦痛と保く刻られたる

野きて止まぬ文字を見よ

然れどもつらき此文字も

世の下を行かむ時

夢の如く消え失せて

『平知』の文字の現はれん

あゝ、憤墓よ

堅く冷く醜く

汝も言ふ事ありねども

親しく我も語りたり

眞実を我も語りたり

偽善の赤き狐火の

割路も迷ふ旅人を

賺し感はず今の世も

世も逢ふの嬉しさを

聞けや此世の夕暮を

告ぐる鈴の聲

見よや城はぐらかへるとて

翼はねをげの群むら鳥とり

いざ林はやしとても帰かへらふん

草くさ溜たまりみ分わかけて帰かへらなん

悲かなしくつらくある時は

またも池いけをヨ守まもり来きん

名な残のこりくも立たあがり

道みちを急いそげばさはくも

情なさけ吹ふきまく夜よ嵐あらしの

陰かげ府ふの諺ことわざふ聲こゑ凄せつし

かもめ

いざこことはん鷗う鳥とり

告つげよその舞まいその聲こゑは

誰たれより受うけし藝ぎ術じゆつぞ

激おどろして高く千ち丈ぢやうの

船ふねをば碎くだき巖いわを噛かむ

荒あき浪なみより習しひいか

回まわりては磯いその松まつが枝えだを

琴かみりを奏かなづる漣なみだ子こ

はほまびしかかもめ鳥とり

否いな々々さまはあらじかし

やま

一行あけり

一行あけり

塵ちりも汚よごれぬ白しろ妙たへの

自由じゆうの翼よく、清きよき音ねの

こもれる笛ふえは射かは玉たまの

暗くろ黒くろより出でて、世よの光あかり

見たる時ときより洪ちが物ものぞ

あ、かもめ鳥とりく

舞まへや歌うたへやさまぐぐ子こ

海うみはふんぢぢの住す處ところふり

墓かぶまるり

○父ちちと子こと

墳かぶ墓つとの前まへよ立てり

女おんなが愛めでしし小こさきもの

手てもて洪ちがすす一いぱいの

水みづ子こ口くちをばえめせかし

よしや言こと義ぎはあらぬとも

甘あまき盃さき

小こさきさき雛雛が親おや鳥とりの

和わ毛け子こ頸のどを入いること

稚ち児ごは額かぶをそが母ははの

冷ひやき胸むねさささ一い付けけぬ

夏世の若き杯を
母はず、れどおのが子よ
甘き盃のますりあり

立里謡

苗の色も照り映え
豊稔雲の影きえし
雨降立ちよもる夕暮よ
堤の上もやうべ等の
聲うち合せ叫ぶらく

向ふのくの白の蔵

向ふの工場の高い家
一番星よ落ちて焚け
二番星よ落ちて焚け
三番星よ落ちて焚けよ
四番星が焚けよ

蝴蝶

そのを思ふふあうなくよ
悲しさいと堪へか収て
野辺よと秋は出でまけり

千草は霜よろろ枯れて
 獨り残りし一毛との
 尾花の蝶の眠りしが
 ゆれが忍びし足音子
 樂しき夢や破れけむ
 何處ともちなく舞ひゆきぬ

花は折らるる思ひてや
 いかも悲しき音み出でつ
 「枯れてゆく身は辞まぬぞ
 蟻は憫れとおぼさずや

花を生命の蟻が身を

秋はそれをば折りとりて
 もと乗しかたへゆきまゝが
 蟻は何處におたりけむ
 後よりわれを追ふて来ぬ

花生て軽く拂ひし子
 こたびは遠く飛び行きて
 姿は見えずありおけり

甲段

「霞よいましよこと問はん
ちどて雲雀の姿をば
情つれふかくかくすあれ仕しほそも
下したは雛ひなのみるものを」

「あはれおろかのここと問ひや
歌うたじて大空そらに舞まひあがる
さまの見えちば雛ひな鳥とりは
声こゑぞ下したは落おつとても
甚いたくも啼なかむ仰あぎみて
姿すがたはたとひ見ええずとを

声こゑをあれは雛ひな鳥とりは
巢ね近く親おやの在あるうんと
心安やすみけく待つまちつつらうめ」

猿さる史し

真ま白しろみ見みえし山やま々の
雪ゆきは早くも消きえそめど
吹ふきくる風かぜは梅うめの戸かどを
叩たたくみはやく春はるの宵よ
立たつや酒屋さか屋やの軒のきさき
情あはれ乞こふなる猿さる廻まわし

衣は薄し破布やいぬのちぢ子

猿の真赤まっかな袖そで無なき

身みもえむ寒さむさしのぎかぬ

俱ともも顛かぶへておたりけり

主人あるじは悶もれし思おもひけむ

與あふる酒さけは冷ひやたくも

温あつき心こころであたゝめて

廻まわす男おとこますしめけり

猿はほしきほ懐かかぬて

悔くるく手てををだせば

主人あるじはいとどお笑いひ

世よの赤あかき面おもてをみ

何なにも酔よひてかさはあかき

日ひ々々酔よひて踊おどりつゝ

此こゝ何なにもも楽しくあるおらん

疾はやく舞まひて見みせよかし

猿は怒おこりてみえしかと

おのが主人あるじを答こたへたれ

力ちからおげふも踊おどりけり

さほぬは見みゆる燈あかり火ひ

帰りをいそぐ猿まゆし
猿を牛首子芥のせて
軒離るれば痛はーや
ちらりくくと漢雪の
薄き衣に降りかくる

螢

夕立さし、あま雲は
をよふく風は拂はれて
星のきは見えそめぬ

今宵も郵也唯いり
小川の岸をさすうへは
見る生痛はし幼き
乞児のいそぐ樂しげな
追ふや螢を^手をあげて
狂ふがごとく走りけり

賢く是も微かなる
螢は今ほ懐き跡み
残され果てし身ながらも
猶も迷いの闇路をば
かたなこなたとせりつて

かさき^手は入りやうず

「やと蟹」

せめて幸^ちふき潤^る

乞^{かたぬ}思^の手^は捕^はれよ

月^の照^す地^{の上}

哀^れ住^むべき所^ふき

乞^{かたぬ}思^の身^みあるぞか

多くもありし^世か

栄^華の満^ちの飽^きたらぬ

都^人は捕^はれ

且^も最早^も此^の世^のものふらじ

情^{なさけ}も美^理も捨^てて

人^のみ多^き世^{の中}

何^もがらへて^世はし

飽^かで苦^{しみ}受^けん

せめて幸^ちふき^世なる

乞^{かたぬ}思^の手^は捕^はれよ

流^る、水^をよすが

水^の脚^低くろひ行^くも

何^も屬^ままでか^世をしも

水^は送^らじ^伴は

変^きらめく^星の星

変^きかはす^星の星

光も薄き汝が身の

彼所の里に任むてふも

またあやまれる願望(ねがひ)

よー草の薫(かほ)を身を隠し

浮世の闇(くろ)を去(さ)るも

やがて秋風(あきかぜ)吹(ふ)き来(き)なば

草(くさ)も枯(かわ)れ行く運命(さだめ)あり

聞(き)かずや露(つゆ)の雫(しずく)の下(した)に

悲(かな)しき歌(うた)をうたひづる

啼(な)くふる虫(むし)のこゑを

人の無情(むじやう)を訴(こ)ふる

虫(むし)は歌(うた)のあるものを

汝(な)は言(い)ふべき歌(うた)しらす

はかまき露(つゆ)を合(あ)負(お)りて

永(なが)く憂(うれ)目(め)を見(み)んよりも

幸(さい)ふき乞(こ)へ思(おも)ひ身(み)を捨て、

暫(しば)しの微笑(えがみ)を興(き)へやし

またもや詠(よ)ふ夕(ゆ)立(た)の

風(かぜ)子(こ)聲(こゑ)を敬(や)まきて

虚空(こゝろ)空(くう)高くたぐよ(は)

乞(こ)へ思(おも)ひ影(かげ)を乞(こ)め行(い)きて

姿(すがた)は共(とも)消(き)へて伸(の)びく

の 少女と猫

露のひぬ間の朝ぼらけ
まだうら^若き少女子が

花の一枝折りて
かたへの椽の端ちかく

眠れる猫まふりそぐく

玉を母貝く

は^りと露はしも

花をこぼれて落つれども

猫は静に眠りて

花の心を知りやうぐ

「あくる^若き少女子よ

君が心の花の上よ

情の^か露のかくる時

あくあく寝むること勿れ

さめて悲しき^露をれば

お小舟

流れぞゆるき大川み

獨まがるくお小舟

見るも^か哀しや鷗鳥

何忍べはか舟の上よ

一羽

めぐりくくして唯ひ
心ありげに飛びつゆく

二つの花

いさよふ川子花ニつ
おいつおはれつ涙れ来て
今ぞ温巻をわたる時
先なる花はたゆたいて
岸辺つたひよながれが
あちや後れしその花の
逆まく温中をぬけいで
はるか彼方よふがるれば
花はいたくも怪きて
あをを首茶ひて追ふてゆく

宋搦男

朝な夕なよ歌いつ
いと逞き脚をもて
宋搦男は撓みふく
働けるころ神聖にけれ

踏み下ろし足のたびごとみ

朱は忙しく躍れども
心はいとゞ平知りて
實に樂一げに見ゆるあり

高名富貴のその念も

襲はるこゝもあらざれば

世に媚び人の諂ひて

隣みを権門の前立ち

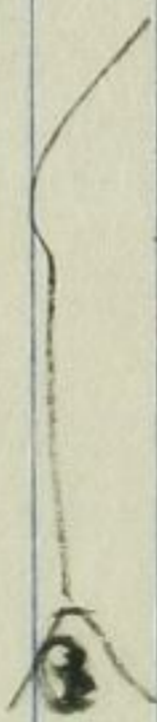
乞ふべき事もあらぬあり

す休みなく踏む足こそは

浮世の旅路曲りず

歩み行くこそ責けれ

蟋蟀



細く間一虫の音も

今はた絶て響き来ぬ

いと寝しき夜中

あはたぐくも蟋蟀

闇より母突き入て

悲しき声啼きたてぬ

やよきり〜世はしも

何を憂ひておくるか

火影ほかげよりつる世よが影の

瘦すぼせたる形かたちを見ておくるか

いづれ啼なくべき秋あきおらば

おどて世よは草くさむらう

世よが歌うたをば歌うたはざる

四面あたりは暗くら黒くろき闇やみふるを

仰あやげば高たかき大おほ空そらを

神かみの意い愛あをほのみせて

望のぞの星ほしぞきりめける

闇やみの光ひかりのあるものを

あききりくす悲かなし痛いたは

世よのみふるか杖つゑとても

凡たゞ吹ふきすさぶ人の世よの

荒あ涼らき秋あきに他ほかつ身みぞ

獨ひとりり思おもひに堪たへかぬて

苦くるしくつらくあるごをよ

目をば眼まなこぎて輝きらける

五ご國こくの光ひかりを望のぞみ見て

真ま実まこと總もつとを耐たむ杖つゑぞか

あききりくす

泣なきて暮くれさん世よをゆれ

現いま世よのつれめ終はるまで

其そのみ涙なみだの潤うるるまで

箱雀

見渡すかぎり千町田の

箱は黄金色いろつきて

賤が伏屋もおどびの

脅もて今は満みたされぬ

こぼろくばかり賣りたる

場所ところえらびて群むら雀

盛さか宴うたげのサせままくちり

業わざしく歌うたをうたひて

聲こゑをよすがよまさるさるさるさ

木林の雀はあきたちて

泣なみみたりたる情なさけきき氣きを

羽はをひろげて集あひあひあひあ

げげなな面おも白しろきき宴うたげかな

仇あだも猜あや疑まもあらずして

其の親密さは同胞の
團圓の如く見ゆるあり

嗚呼個人と個人との其の間
國と國との其の間

敵てふ念取り去られ
相互に盡す同情の
いふく保くふりゆきて

國の境界も一時の
假令の夢を消えさせて

春夏秋冬はた冬
四時のちがみの美はしき

楽しき園子人々の
共み路べはわかばかり
娘からおどろかばかり

幸福ある事ぞ人類も
暫し仰み見るるあり
鳴子の音も群雀

一團の雲のこと

齊しくたちて飛行けり

鷗

奔望の海は深々々

微笑めるが如く見られたり

二つの河の鞆鞆々

波打ちながら進み来て

軒^{あふ}あふさまの^{まの}じや

沫は躍^りて^{よも}あ^み散^り

霧は空へと立ちのぼる

何思ふらむ鷗鳥

優一の翳^あひろげて

ゆきつもどりつ^あ糸^の中

二つの影

公羽と^あ影^の唯^ふたり

住へる小き破屋あり

聖の中より朝日子の

今日けふの務のはじめとして

先送りし其の時よ

翁は稚児を膝の上よ

鳥の巢支ふ木のごとく

いと安らかな抱きたり

稚児はさすがに微笑ぬ

公羽は尚もいやましき

笑まさんものを髪が頬を

蓄たぐ微かたなす頬ふさつつけて

誰が思出の記念かたよや

古ふるりし鏡よりつしたたり

荻あしの如き口よりぞ

洩れたる聲の憂らしき

公羽はかくはるへたり

坊ぼくのもてるは花びの

日々に湧出る泉あり
祖父の毛てるは悲みの
寄せて返りぬ波ふるを

水草と木の葉

心ふげも多きつ

流る川のをが甲

生ふる水草は流れくる

木の葉止めんけしきあり

木の葉も寄らんさまあれど

流る水を如何せむ

共は流れし任せたる

身は悲しき別れあり

あゝ、愁ひ沈める人々よ

同情を得ぬ人々よ

朝も夕も悲める

心と心かたらいして

慰む藉えんと思ふさへ

今は叶はぬ世ありけり
 同じ夏身なつみの秋あきなよ
 暫し涙をばはららか
 悲かな痛しみ多おほき世の中よ
 住すせたりてふ身みあららずや

燈臺

梁はり夫の妻は燈臺よ
 登りて火をば照あたり

今しも暗黒やみに籠かこはれて
 死し進すすみゆくその船ふねは
 生命いのちの光明ひかり仰あぎ見て
 暗礁くらげの如ごとく行き過すぐる

嗚呼ああ生命いのちの道みちまは
 細こき優やさしの指ゆびあり
 か弱よわき女をんなの指ゆびあり

杭

夢の如くよ立てる杭

朝ふ夕ふ止らず

流る、水を見送り

世を假の宿とせし

幾代^{いくよ}の世の住家^{すまが}は

ふれるや問はん、告げよ杭

枯れて浮びて流れゆく

水草見しもいくたびぞ

追ひおはれつ嬉しげに

世^よをめぐるその魚は

のちはいづこまで行く

鳴呼、うつりかはりは世の中

時^{とき}の流の戯^{あそび}せよるを

永劫^{えいこく}の

日星は汝の前より落ちて

汝の上より日は暖かき

花の下人

入日の影の消へゆきて

淋しく立ちし岡の上より

松と櫻の立てるあり

姫と巨人の言葉なく

對ひて立つふ似たりけり

眠怪しく光りたる

男は岡のぼり来て

松を抱きて揺かしぬ

世何ぞ男は思ひけむ

憤怒の色ありはれて

聲ふりたて、罵りつ

こたびは櫻振ひしが

心地おけみせ散ることや

世は情ある秋友よ
いひて檻檻を包まぬ
形骸をそこも横たへぬ

憂き悲みやさまくの
事の映りてひかりたる
眼は今や閉されて
舞きをめし大匠の
星はこなたを見おろせ

松よする哀歌

根の上の佇み
松を撫でつうたふ歌
世の苦痛かぞふれば
悲しき材もおよぼしな
風雪雨散凌ぎつ
幾百年を経たりしか
空よは雪の脚早く

紅塵天のぼるとき

誰か知らんや千秋の

恨を汝か御音かして

悲しき歌をうたふとは

秋は煩悶おほくして

現世に獨り轉轉べども

短き夏の夜の夢

覚めば涼しき天の川

救ひの水を掬ふべし

憫の栂よ汝はしをも

老いたる栂とことほがれ

浮世人よりめでらるも

幾百年の苦痛は

人の言義を消ゆるべき

『時』の翼の飛び去りて

朽ちて倒れは世をしも

誰か憫とかへりみん

嗚呼、秋も去るのありものを
朽つれば世は終りなりし

歌柱

うららかにさむ春の野の
かたこなたに歌柱
草葉の上をまもりして
御空に通ふたはしり

別離

兄

永き別とあるからよ
しばし涙をぬぐか
薄紅の唇を
吹く春風よふるはせよ

弟

東の空をかむれば

花の都の道じりし
栞をかすみて見えぬか
君ゆく方と思ふから

兄

今一たびは身よ
葉の花さける高き家を
うるみがちなる眼とて
瞳子こらしめてちがめみよ

身

ありし林家を尊とせば
かしこの家は板の木柱
忍びくくつむぬは
またも涙と見えぬあす
悲しや父は畦道
はかなく消えし陽と穴の

兄

母も悲しや北戸口の

椿の雨露を散りよしも
かゝこの家は恨みあり
泣かじとすれど城胸は
沸えし血汐のぬきかゝる

身

巢をとられたる小雀の
親矢ひし雛鳥の
別るもつらし西東
低き秋家の軒みるも

高きかのや役家の恨めしき

兄

橋の袂をすかしみよ
旅する人のためよとて
人の情はなせがをほられたる
標石たていしの字は異ちがふれど
二人が胸を刻うまれし
恨うらみの文字なを差さある

身

夜の間ふふる春雨子
ぬれてもたぐる土筆し
人子摘まれてしをるとも
血まであるせし此文字の
いつかは損えんこの恨み

先

何時までいへば縁言の
糸のもつれのとかるべき
のどけく永き春の日子
いか子心をつくすとして
いざこれよりは別るべし
脚絆あやひの紐を止めよかし

身

行かんとして水みづ君が眼子
浮ぶ情なさけの白露しらつゆや
眉まゆをひそめる糸虫の
悶もだ轉たや愁おもをいかせん

40

兄

ありし秋家を見返せば

門の緑ふたもりの二本の

松は果敢ふき父母の

立ちたまふこと思はれて

待ちたまふこと思はれて

弟

かなたの岡み蓬つみ

こふたの川み魚あざり

山ふところまむ稚拾ひ

冬は圃み大根引き

兄

裏み接ぎたる柿の木の

實みのふるはてや如何おらん

根ねをかちたる菊さ苗の

生なまきいとい思はるく

上板

身

君は東へ旅衣

我は西へ行く方は

漣ちかき都とや

兄上さき早くおませか

また逢ふ時のうれしさよ

兄

萩はぎの若わか葉はの宇うくより

浮世の風を知りそめて

荒野の木のいたどり虎とら林りの

酸すっぱみ世の味をふめんとて

獨ひとりり林はやししきふれ世よか身を

鎮守の神かみ祈いのるか

身

去年こぞの踊おどりにぎはひよ

團扇あふぎ子こかける月つきの夜よよ

君きみがうはさはたつ鳥とりの

村むらより村むらへわたりまき

上坂

見

山領の櫻のちりぐり

思ひ乱るあはれが心

甲斐なきこゝろを嘆くより

焼野あやのに生ふる早さ萩はぎの

萌ゆる力をかもへかし

身

怪しや君がかほはせの

ほのかよあかし夕ゆふ焼やきの

いざや袂たもとを合あつべし

日もはや西にし入い相あの

鐘かね先さきかすかよ聞きゆれば

見

舞まうてたのしき様さまくよ

一つの花はなよ口くちつけて

吸すひし薰かほりを四よつ油あぶら

濡ぬれし袂たもとよふきかけよ

身

橋の下ゆくせらぎの
春をば送る樂の音を
別離の秋と聞かばや春

兄

いつ逢ふこり、定めぬは
けふの命の琴の音も
うれひを捨て、合さばや

身

海山里を越えぬべき
羽羽異のほし、燕の
曠野よこぎる白鳩の
矢の翅こそ戀しけれ
遠くへたつときくからよ

兄

美山河をへたつとて

心の道に境あり

晝の疲れは叶はずも

夢路をかよへ夜ふくは

身

梢の蟬の鳴く時も

笹葉の雪のつもる日も

心つみいたしまん

夏ふるまわれ兄上よ

兄

汝ふれ贈らんたん蒲公華はしの

音ねふれぬ花はなのふり

身

君きみ持もげんわが家いへの

紋いづを似にたるさ化かすみれ

兄

共とも望のぞをを刺さのの木の

香みほひ抱きてかへるまで
また踏まんとは思はじな
渡り去れたる石の橋

身

彼家よまさる家たゞ、
雲もやどりんふたもり二本の
千歳の柁を植うるまで

兄

こよひの宿は程遠し
三ツ四ツ五ツ坂こえば
か弱き足のおぼつゝな
涙ぬぐひてたてよか
朧ろみ目もいでたれば

猫を捨つる哀歌

月の光子ながむれば
消えてゆくへうたかた水泡の

まばし命の玉の緒を
つなぐ生はかた欄干

身みあまりある病いと氣きの

朝あ夕ゆの苦く痛いたを

流ながる水みづ華はならん

せめて侍さむらい工こうの月つきをみよ

齊いせさらばへし汝なか身みは

つれなき人の心根こころねの

棘げきの宮みやは追おはれし

今け日を限かぎりの惱なごみある

情なさけの名なの散ちりりはて、

木き枯かすさぶ人の世よの

空そらしき春はるみちかんとより

木きの葉はと共ともに流ながれゆけ

河かを慕こぼふか北きた心こころしげの

かすかともる糸いとの音ねや

わちさきふるふ世が是は
ちほも身世の戀しくて

悲しき杖の心もて

涙をはかるは恨みそよ

身敵なき智慧みさそはる

ゆくへいか子久思ひそよ

柳の糸子蜘蛛の

糸子追れるふりをみよ

愁を融みうたひづる

虫の聲をき聞けよか

生としいけるものみよ

いづれ免れぬ運さだめあり

長れ先だついろくの

花も山嵐のためしあり

啼きて生る緑見や

泣きて世を經るわび人や

繁華の露を解ふ人も
いづれも泣きて行かざらん

あゝ味気なき世の中も
何しよ汝はおひのびて
つれなき人の香を生かぎ
罪をかさんと思へるや

我も此世よろまれ来りて
世の道寒き霜をふみ

真愛身の上と申故なる
人よ恨みの發せぬ者よ
罪をかさぬる苦しきよ

朝を夕ふふ死の鞭の
われを導きびくせや
神の園生を追はれつ
我はさまよふ羊の

泣きて別れのつらくとも

泣くが浮世の常もかも
流は救いの水をえま
拭はすがらん神の袖

月の老はさえくく
岸の枯葉のはらくく
結ば消ゆる水泡と
さぐめきふり流れ行く

墳墓

墓場に出でくふがむれば
空に輝く星のかず
世ときめきし帝王の
老に似たり冠の

列ぶ墳墓をみわたせば
パンを興へよ救ひよと
天を仰ぎて訴へし
飢へたる人の群のごと

草葉をきつひの宿^ヤり

甲^ト路を命^ト鳴く出ほ

いつれも向^トむ悲しめる

魂のゆくへ

蝙蝠荒るゝ夕闇子

河のほとりも来てみれば

たばしり流る水音は

冥^ヨ府^ミの聲かも物凄し

何またとへん春の花

紅句不^{わか}若^{ごと}人が

泡と消えしはこゝふるか

XXXXXXYY

夢と或心と幻と

光のろちも迷ひたる

魂の他思^トつみで飛びしまへ

せよは生れて薄命の

君は瞳をいらめかし

狂ふか如き黒雲を

おのが心の面影と

立ちつゝ君は見たうしが

星の光を仰ぎ見て

神の導く御光と

常闇の世子彷徨ひし

君は微笑みつゝ眺めしか

矢よりも早く流れゆく

汀の石子腰かけて

眼を閉ぢて現世の

毒酒に酔かしわび人を

天国の羨み送りゆく

水の細音と聞きよしか

幽かよひゆく水車

眠を誘ふ音を聞き

永久覚めず悩みあき

夢見の郷子君は入り

樂しき夢を續けんと

あゝ一廿助子思ひいしか

草葎木よかゝる白雨路の

裾よきえたる其時よ

糸より細きわななける

心は如何よ齧へしか

薄くまたゝく此螢火の

空よきえゆく其時よ

同じはかあき運命を

共よ消えんとおもひいしか

そよぐ青葎木の下よ立ち

現せよ名残惜まれ

思ひし事や何ありし

闇路 辿うてこの岸へ

進む一足くよ

暗黒の此世を脱け出で、
光輝る金色の

天風の巻り内み入る
思をせしか、やよや君

鐵鎖の響おごそかよ

鳴りてわたれる此世より
遁れて自由の天津国
行かんと君は願ひしか

清き流み身を室りせて

歌や蛙の聲を聞き

君は此世の濁り江を

漕ぎ出て末は天の海

波風たぬ海の面よ

西よ東よ、世の

所定めず流ること

君は柱の舟みのり

樂しく歌をうたひつゝ

浮かんと君は願ひしか

憂世を渡り假の名は

昔も今も猿廻し

まわち男の笠よつれ

踊り猿も君は似て

君は悪魔の鞭の下

躍りて果は良心の

鋭き聲も身を責めつ

狂ひてこゝも来りしか

自ら殺す罪悪を

君は知らぬもあらぬども

生れてすぐよ世の味を

にかきしものぞと思ひつめ

憂悶のふれし君ふるも

今は苦悶の耐へかねて

おぞくも君は憤満の

炎も燃えて永劫の

消えぬ地獄の火も落ちて

現世もまさる苦痛を

君は受けんとおもしろか

情^{こころ}を君は知るからに

現^ませよつなぐ因^よに愛^あの

絆^{きずな}をたつる堪^たへかねて

涙^{なみだ}もくろくそのうちよ

心の駒^{うま}を狂^{くる}かきて

綱^{なわ}を切りしか、あはれ君

悲^{かな}しき君と知る友の
朝^{あさ}を捧^{たも}げしおぼの

慰^{なぐさ}藉^{せき}さへも真^ま実^{こと}をば

人も猜^{うたが}疑^{たが}ふ心より

君が心は盲^{めくら}目^めるて

頼^{たの}みの杖^{つえ}もあげ捨て、

迷^{まよ}ひてこゝまかりしか

人生は何、花籠^{はなかご}の

空^{そら}見^みもあきものと思^{おも}ひあし

四季^{しき}よ花^{はな}乱^{みだ}れ空^{そら}見^みも結^{むす}ぶ

天^{てん}の常^{とこ}盤^{ばん}の木^き林^{はやし}よ入^いる

董火るれを長久よ

身は受けんと願ひしか

五臓の活動血のめぐる

君の身體の沈みたる

あつ沈みたる其時よ

水泡は如何の咽びしか

君が老痛の其時よ

臆ろるかすむ君が眼は

何處の方をかめしか

かすまてよ世を早敷ふみて

君が死せしや何のため

君絶望の鬼の手

ひかれてこゝ子潤みも

歩み来りし汝をば

流し問へは瀬を早み

急ぎ行く音高うして

悲しや元の水あらす

君がたづね骸は今いまいづこ
君がたましい魂たましい今いまいづこ

非なしとと餘あまりり聲こゑあげて

水みづのの節ふしの

歌うたををたへば水鳥みづとりの

昔むかしのの間ま出いででたたちちててゆゆく